

天使が帰る日

どうぶつたちからのメッセージ



絵 ・ 文
菊 地 さ ち こ

この絵本は、ある地域の「犬抑留所」（動物保護・収容施設）
と呼ばれる施設に
見学に出かけたときに、わたしのこころの耳に聴こえてきた
どうぶつたちからのメッセージを
お届けするものです。

犬やねこを、こころ通じ合える身近な友だちとして
子ども時代から、育ってきた私にとって、
つらい境遇に置かれている、彼らに心を寄せることは、
悲しみに打ちひしがれている、子どもが目の前にいるとしたら
そっと手を差し伸べて、守ってあげたい
と思う気持ちと同じように、
とても自然な感情でした。

動物収容施設で出逢った、どうぶつたちからのメッセージが
あなたのハートにとどきますように。

どうぞ、こころの耳をすませて 聴いてみてください

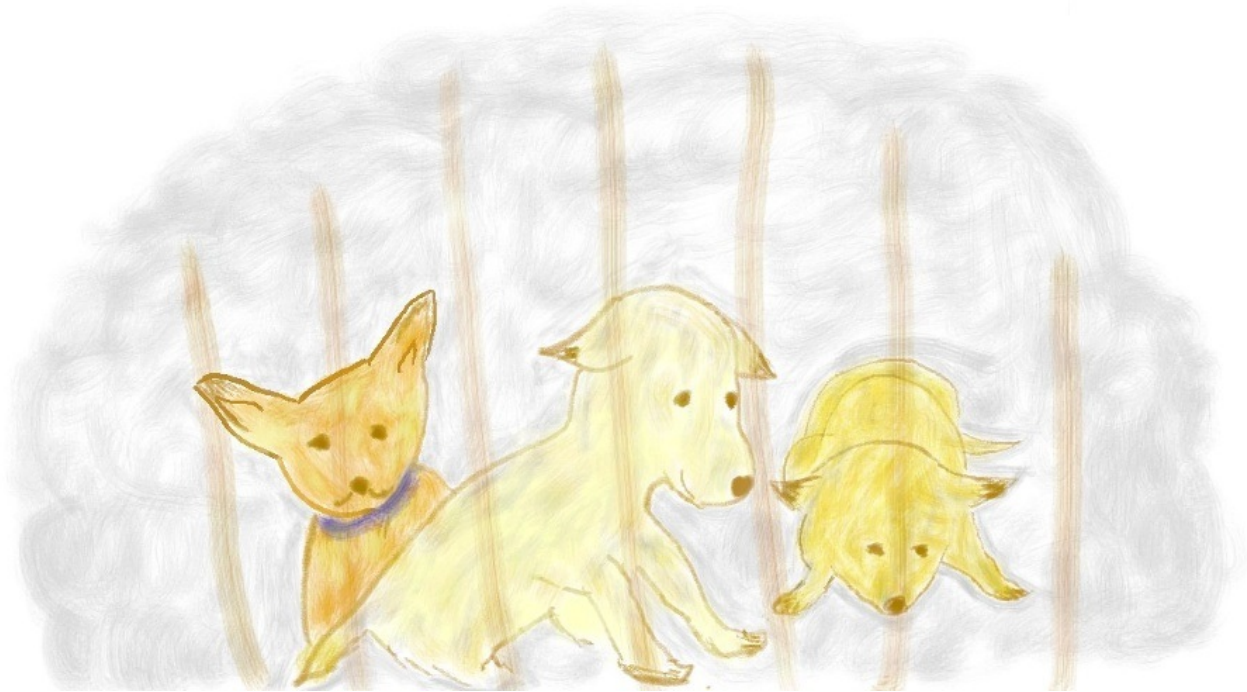


ある年の夏、
わたしは住んでいる地域にある
犬抑留所へ、見学に行きました。



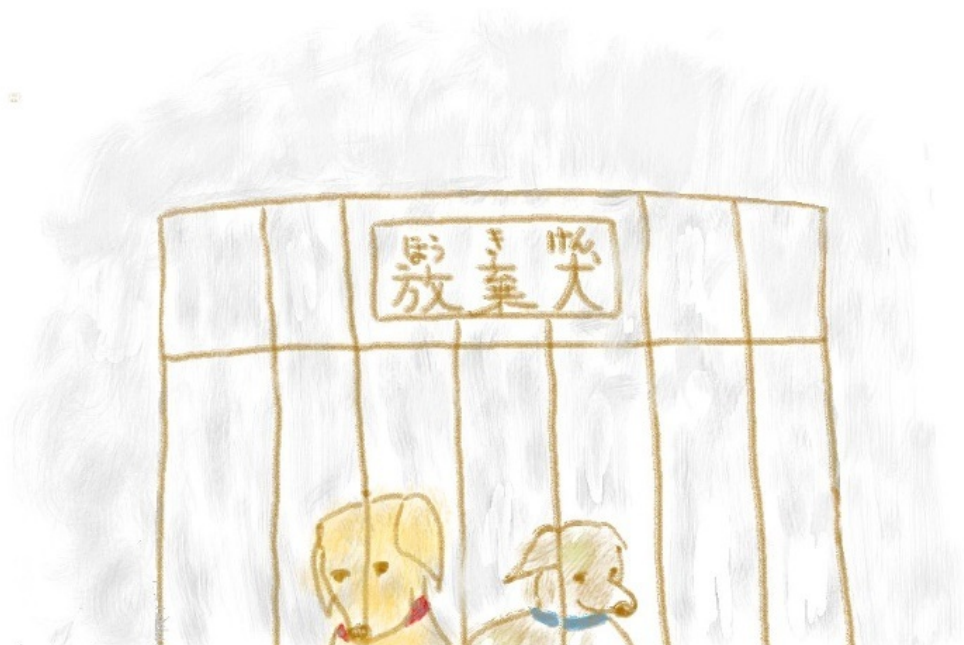
飼い主の都合で、
飼えなくなってしまった、犬やねこ、

迷い犬として捕獲された犬が
収容されている施設です。



そして、あたらしい家族が見つかる
ほんの一部の子犬などをのぞいて、

「さつしょうぶん（殺処分）」という、
つらい現実が待っているのです。



ワンワン！　ぎゃんぎゃん！

施設に一步足をふみ入ると、
不安とさびしさを
吠える、犬の声でいっぱいです。



施設の中は、収容された日や
捕獲された場所、
犬どうしの相性などによって
いくつかのオリに、分けられています。



ねえ、君

どうしてここへ来たの？

わたしは、そおっと やさしそうな顔をした
レトリバー犬にきいてみました。



大きくなりすぎたから、
もう世話ができないよ って
おとうさんと、おかあさんが言うんだ

ボクが大型犬だって、
知っていたはずなのになぁ・・・

そして悲しそうに、うつむきました。

わたしは、胸がいっぱいになりました。



りっぱな体格をした猟犬は、
うつろな目をして言いました。

ボクが吠えるから苦情がくるし、
もう飼えないからって
ここへ来たんだけど、これからどうなるの？

なんかここは、とても苦手だなあ。

ボクが吠えるのは、ちゃんと理由があるんだ。
気がついて欲しいのに・・・

わたしは、柵の間に手をいれて、
やさしく なでてあげることしか、
できませんでした。

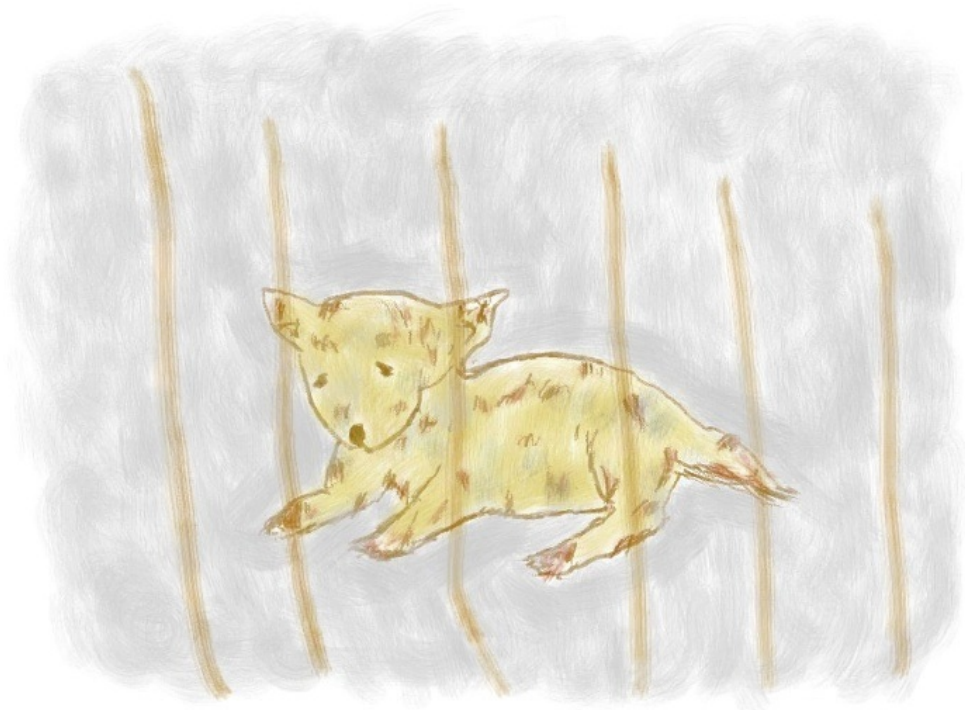


からだの毛が抜け落ちて
赤くただれた足をひきずって歩く老犬は、
皮膚病のようです。

かわいそうに・・・

「どうか、すこしでも
苦痛を少なくしてあげてください。」

わたしは、神様と天使におねがいしました。



となりのオリへいくと

まだ子どもの、かわいらしい雑種犬が
あまえた目をして 伝えてきました。



「おかあさんに
赤ちゃんがうまれるから
ここへ来たの。

あたらしい家族を みつけてくれる
ところなんだって。

はやくここを出て
あたらしいお家へいきたいなあ。」

わたしの シャがんだ ズボンの上に
涙が ぽろぽろ 落ちました。



それぞれ事情はちがっても
自分からのぞんで、
ここへ来た犬は
一頭もいませんでした。



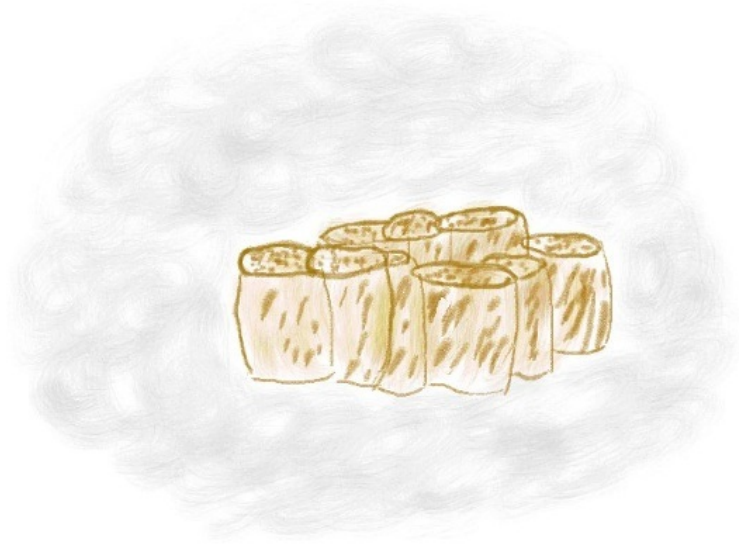
この施設では
一週間の、抑留期間が終わると
一酸化炭素ガスを注入した、ガス処分機で
さつしょぶん（殺処分）が行われます。

犬やねこたち、
そして、飼い主が迎えにくることを
心の片隅で、期待しながら
その日を迎えた世話をしている職員の、
いちばんつらい瞬間です。



焼却炉のわきには
ドックフードの袋に入った
遺骨がありました。

あの犬とねこたちが、
確かに、この世界にいたことを
証明する唯一の形見です。



施設の敷地内には
世話をしている職員の方が、
悲しい思いで
天に帰って行った子たちのために

お墓のまわりを、花でいっぱい
してあげていました。



ぼく 人間って だいすきだよ

だって ともだちでしょ？

生まれてくるとき

かみさまに 聞いたんだもの。



この地域では、少しでもたくさんの
動物のいのちを、助けてあげたい と願う
保健所職員のみなさんの思いから、

幸せになることができる、
あたらしい家族との縁結びや、
楽しく犬と暮らすために必要な
しつけ教室を、行っていました。

また、よりたくさんの
いのちが幸せになるには
市民のボランティアと、
うまく連携をはかることも必要です。



この4頭のころころした
かわいい子犬たちは、

抑留所へ見学に行った
ボランティアと、
保健所との協力で

やさしい家族のもとで、
暮らすことになりました。



抑留所にいた、
目もまだ開かない赤ちゃん犬も

無事にボランティアのもとで、
すくすく成長して

その後、あたたかくて、
たのしい家庭に迎えられました。

今では、人間のおにいちゃんや、
お姉ちゃんができて、大のなかよしです。



どうぶつたちは

おなじ あたたかい いのちを持った

わたしたちの 大切な 家族です。



はじめて、犬抑留所を見学したのは、2000年の夏でした。

その後、2年に渡って何度か訪れ、たくさんの犬やねこたちと、
悲しい出逢いを経験することになりました。
そして彼らは、その瞳でたくさんの物語を聴かせてくれたのです。

各都道府県にある動物収容施設は、この絵本のような比較的小規模な
施設から、オートメーション化された大規模な施設まで、
形式とその名称はさまざまです。

しかし、収容されたいのちが、再度しあわせになるチャンスは、
とても少ない　という点は、どの施設も共通しています。

地域の動物愛護センターや保健所で、動物ボランティアや、
犬やねこの、あたらしい家族を、募集しているところも
多いようです。

また、動物愛護の活動をしている、信頼できる個人や団体で、
家族として迎えてくれる家庭を募集しているところもあります。

「なすすべのない　いのちを守りたい」　と思う気持ちは、
わたしたちが人間として持って生まれた、
ごく自然な　いのちへの思いやりであり、感受性のように感じます。

それでもその感受性は、競争主義で
やさしい気持ちを素直に表現することを、ためらってしまうような
社会の中では、めめしい、センチメンタル、きれいごと・・・など、
なにかと軽視されがちなのでしょう。

犬やねこなどの身近などうぶつたちは、
どんな時でも、わたしたちのハートの中心に寄り添ってくれて、
やさしさと思いやりを、
魔法のように自然に引き出してくれる存在です。

わたしもまた、彼らによって開かれ、
また、思いやりや、愛について考える機会をもつことができました。

すべての天使たちのくもりのない瞳に、
よろこびがあふれる日が訪れるよう願い、そのために、私たち人間の
持っている、思いやりとやさしさの力を信じています。



天使が帰る日

<http://p.booklog.jp/book/71602>

著者：菊地 さちこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sachiko33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71602>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71602>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ